

やけに雨多き五月の中ごろの詩人の死やら夕
チヨウの死やら
笠巻 睦
靴ひもを夜半に解きつこの春は職務質問受け
ざりにけり
しおせとくや

裏庭のなよ竹の根元光れるかわが里の家に赤
子生まれる
山野 あい
新幹線の窓ガラスに当たり溶けし鳥 人は石
段に影を残して
九月号・大口 玲子

つゆの雨降りみ降らずみ過ぎ行けば傘をさす
人傘ささぬ人
蕪澤 陽子
目覚めれば知らぬ香のする指先に何をむしり
てみし夢の際
松本 実穂

令和四年一月号から九月号まで、初めて
作品評を担当した。無選歌欄とその次のひ
と枠が担当だったが、どう読んだらその歌
にとつて「いい読み」になるのかを考え続
けた年だった。見当違いの読みがあったか
もしれないがお許しいただきたい。

一月号から振り返ってみると大きく二つ
の社会現象の歌が見えてきた。まず一つ目
は、二月にロシアがウクライナへ侵攻した
ことにより始まった「戦争」に係る歌。
六月号からこの戦争を詠んだ歌が多く見ら
れるようになった。テレビに新聞にインタ
ーネット上にウクライナの状況はつぶさに
流されており、その情報をどのように短歌
という形式におさめるか、令和という時代
にどう詠まれるのか注目した。

次にコロナ禍三年目となった三月にまん
延防止等重点措置が解除され元の生活へ戻
る扉が開かれたことに関係する歌。いまだ
にオミクロン株の変異等によって感染者は
なかなか減らないが作品を通して生活の明
るい変化を読めたことは楽しいことだっ
た。例えば休止されていた学校行事が戻っ
てきたり温泉地が賑わってきたなど。

無選歌欄の作品には毎回たくさんの刺激
を戴いた。対象物との距離の取り方につい
て「なるほど」と唸ってしまったことも多々
あり、中でも身めぐりを丁寧に詠んでいる
田中拓也、歌の向こう側へと読みを誘う奥
田亡羊、土地の空気感や家族の密度を伝え
ている本田一弘、河野千絵の作品にはここ
ろ揺さぶられることが多かった。

選歌欄では一回きりの出会いの方も多か
ったが、梅原ひろみ、岸並千珠子の安定し
た見立ての良さに目を見張った。速球と見
せかけて投げられる緩いボールのような視
点が心地いい。また長沼通郎、しおせとく
やの歌の軽みにはこれからも注目して読ん
でいきたい。総じてユーモアやウィットの
大切さを考える年となった。各地の生活に
根付いた歌や挽歌の中で良い歌に出会う喜
びは大きかった。反面、もつとテクニカル
な批評ができたのではないかと反省してい
る。今後の自分への課題としたい。また拙
い批評に拘わらず頂戴したお手紙やメール
はとても励みになった。九ヶ月間お読みい
ただきありがとうございます。